

ハカランダの花のもとへ(ラテンアメリカのたび)

著者	吉田 ルミ子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	1
ページ	34-36
発行年	1984-10-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006807



ハカラランダの花のもとへ

吉田ルミ子

(図書資料部)

ハカラランダの花

今夏7月14日から8月12日にかけて、カリブ海地域と南米大陸の計6都市を現地調査した時の印象をつづってみた

ジャマイカ

カリブ海地域への接近は空からよりも海からなすべきなのかも知れない。

マイアミからの乗客は大半モンテゴ・ベイの空港で降りていった。その空港はなま暖かい海の空気が運ばれてきているようだった。一人の黒人が空港の渡り廊下でギターを爪弾きながら歌をうたうのに出会った。のどかな風景のように思えた。しかしキングストンの下町の風景は、名状しがたく貧困であった。波止場に沿った町並みは、海の風に吹きさらされて何かへばりついているペンキぬりの板きれの列であったし、そこに暮らす人々は、そこに居ざるをえないから居るとい

か」と。確かにそういう状況において絶望以外に逃げ場を見出すとしたら何に出会うのだろうか。ある黒人労働者は、「私はひと頃のんだくれて悪いことばかりしていました。けれども、妻からある宗教への入信をすすめられてからは、前向きになりました。私は誰でも前向きの方が好きです」と私に告白した。定職を見出して、それに安住できる間はよい。子供たちは車のガラスみがきをしながら小銭をかせごうとする。少年たちは新聞やスナックを車に売りにくる。男たちは職もなく街角に立っている。この国の失業率は公称35%、実際は50%だと聞く。IMFからの勧告に従って政府は公務員労働者の勧奨退職と定年短縮をきめたばかりである。職を失う者が増える。生活必需品のパンすら輸入しているという。「ボーキサイトの国際価格が下がっていますし、観光収入も頭うちで……」とデイリー・グリーナー新聞社のブルート副編集人はなげく。この疲へいぶりは、長い間、植民地として宗主国から収奪された結果なのではないか。この国に雇用機会を提供する人はいないのだろうか。利潤追求ではない形で――。

私が接触した公務員たちはしかし、まずまずの暮しをしているように思われたし(台所を眺めたわけではないが)、英国留学の学識を生かして明るく仕事をしているように思われた。特に女性たちが、細部の業務を支えている。

パラグアイ

モンテビデオからアスンシオンに飛ぶときにエンカルナシオンの上空を通過したかと



ハカラランダの樹木。淡紅色の花が咲いている(アスンシオン市)

う風情で家々に辻々にたたずんでいた。息をのむようなその悲慘は私に写真にとることをためらわせ、しかも人々はそこに居ることが旅人をうちのめした。

ある日本人の青年がいう。「ジャマイカの黒人たちは何ともいえない卑屈さがある。彼らにはアイデンティティがないのだ。故国から奴隷として連れてこられた土地になぜアイデンティティをみいだすことができるだろう

ラテンアメリカのたび

ラテンアメリカのたび

思われた。エンカルナシオンは日本人入植者の多い土地と聞いていた。パラナ河のわん曲したあたりである。アスンシオン市はパラグアイ河の湾がひきこんだ岸辺に展開している森の都である。パラグアイにとって日本はODA 援助額で第1位の国であるときいた。日本からのミッションがひっきりなしに到着しているという。ホテルのレセプションは日本語のあいさつをしてみせてくれる。彼らはドイツ語、英語等をあやつる。土はブラジルと同じ赤褐色である。ラプラタ河が赤いのがうなずける。冬というのにうっすらと汗ばませる昼の澄んだ空気なかで、さるすべりに似たハカランダの花が街路をいろいろとっている。官庁は朝7時半から始まり、12時から3時半はシエスタで、3時半から5時、6時ころまで働く。昼間働いて夜は国立大学で学ぶ青年男女も多いとき。街では手づくりのパン(小麦+とうもろこし粉+チーズ)を売っている女性たちをみかける。インディオの女たちが手工芸品を肩にかけて売り歩く姿にもどうかすると出会うことがある。市電はだんだんと廃止されて車がひっきりなしに通る。要所所に兵士たちの姿がみられる。「田舎をみるべきです。日本人居住地もみるべきです」と一人の一世の青年から叱られた。「イグアスの滝もみていくべきですよ。夜行バスで行けば翌日の飛行機に接続できるのですから」とも。しかし調査日程はつまっていて観光どころではなく、調査に動きまわるなかで土地を



覚えるほかない。確かに田舎をみたい願望はあった。人びとがどんな暮らしをしているのかは一介の旅行者にはわからない。観光も土地鑑形成の大切な一コマではないか。さきの日本人青年が5歳のころ入植した時には、開拓する密林のなかにはジャガーも毒ヘビもいたという。空からみるパラグアイの密林は曲りくねった河川の外側の樹木の下までも冠水しているらしく光が反射してくる。治水に対する心づかいが必要と思われた。

日曜日の市場を楽しむ市民(モンテビデオ市)

ベネズエラ

カラカスではじめて雨に出会った。30日間の旅の最後を飾るカリブ海の雨であった。空港と市内のあいだはひと山越さねばならないが、すべるような車道のきわには貧民くつがあるらしい。未明であるので無数の灯がキラキラと輝いていて美しい。ヒルトンホテルの運転手の一人が説明してくれる。「彼らはいかに貧しくても、灯を消さないだけの誇りを持っているのですよ」と。信じられないことだった。

カラカスの街は、ちょうど神戸の街のように、六甲山に似た山の山腹に沿って横長にひ

ラテンアメリカのたび

ラテンアメリカのたび



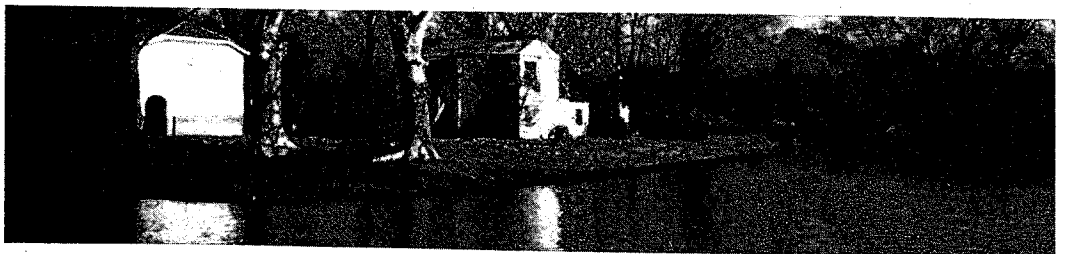
ラプラタ河沿いの海岸通り(モンテビデオ市)



木造二階建ての
グブアフリカ・カリ
ストン市

ろがっており、市内の移動は車に頼るほかない。市内のアパートは、サンパウロのそれらと同じに、治安に対する心づかいに満ちている。窓には格子がはめられ、駐車場の出入口は巨大な格子扉が開閉する仕組みになっている。官庁がダウンタウンから徐々に山の手に移ってきていて、中心街に近い中央銀行ではパスポートの呈示を求められる。しかし人々の応待は親切である。ベネズエラの地名には土地のインディオの用いた名称が多いせいも、逆に土地鑑をつかむのに苦労する。うす茶色の肌をした人びとが空港でもホテルでもきびきびと働いている。職をもとめて近隣の国から流入する白色民が多いときく。

た。人びとは定職のある人でも一つの職では足りずに夜は別の企業で働く。アルゼンチンの若い恋人たちは、結婚したくてもできないのだそうだ。急騰するアパートを借りることができないのだ。ブエノスアイレスの一方通行路を駆けぬけるタクシーの若い運転手は信号待ちで朝の乏しいスナックをかじる。いくら眠らないという。「眠っていたら生きていけませんからね」というのが彼の言い分だった。それでも私の出会ったウルグアイの女性も、アルゼンチンの女性も、一斉休業の土曜・日曜には、私を市内見物に連れ出してくれたり、家に招いてくれたりする優雅さをもちあわせている。2年前にモンテビデオでカラーテレビが8000ペソであったのが、今年2万5000ペソであるという。彼女らの目前で3万円のスエードのコートを買うことははばから



アルゼンチンとウルグアイ

ブエノスアイレスもモンテビデオも冬の最中に息づいていた。木々は枯れはて、古色蒼然たる石の建造物が灰色の市街を形成している。人びとは毛皮のコートのえりをたてて足ばやに通りすぎる。それらの人びとの顔つきは心なしかきびしい。物価の上昇率は月々17%、年間5～6倍のインフレであるという。ドル生活者だけがうるおっている。「マーケットの食料品の値段が先週と違っているのに驚かされます」とモンテビデオの女性がいう。モンテビデオでは停電が散発的にはじまっ

れる。外国に対して国民1人当たり1500米ドルの借金を支払わねばならない勘定なのだという。第二次大戦中に貿易でうるおったウルグアイがはじめて経験する苦境であると一人の愛国的女性が説明してくれる。原爆を被った日本人に対する同情を忘れないのもウルグアイの人びとである。

ブエノスアイレスのフロリダ通りには職につけない青年バイオリニストが友人と2人で辻音楽会をひらいて、道行く人びとから心ばかりの生活費をおおいでいた。私も同情してポケットマネーを2枚置いて去った。あまりにも巧みな音色であったから。